評価に当たっての留意点

学習評価には、児童生徒の学習状況を検証し、その結果から教育水準の維持向上を保障する機能があります。各教科においては、学習指導要領等の目標をふまえて設定した観点ごとに学習状況の評価と評定を行う「目標に準拠した評価」として実施します。

評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料

評価規準を作成し、子どもの姿を見取っていくために、参考資料を活用しましょう。各教科等における学びの過程と評価の場面の関係性を明確にしておくことが大切です。

例：「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

主体的に学習に取り組む態度とは、自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、**学習に関する自己調整**を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしている姿と示されています。

○○ができるようになりたいなあ。 ▶ そのためには○○を学ぶ必要があるな。 ▶ 勉強したけれど、○○も必要だぞ。 ▶ 勉強のやり方を少し変えてみよう。

このような主体的に学習に取り組む姿を評価するために大切にしたいこと

- 単元や題材を通じたまとまりの中で、子どもが学習の見通しを持って、学習に取り組み、その学習を振り返る場面を適切に設定する。
- 子どもが主体的に学習する場面を設定する。
- 主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善を大切にする。
- 学校全体で評価の改善に組織的に取り組む体制づくりが必要となる。

主体的に取り組む態度は、学習前の診断的評価のみで、または、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動のみで判断できるものではありません。

観点別学習状況の評価について

観点別学習状況の評価については、知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の結果などのみに偏重した評価をするのではなく、評価の観点を明確にし、資質・能力のバランスのとれた評価を行っていくことが大切です。そのためには、指導と評価の一体化を図っていく必要があります。

高等学校教育でも、義務教育までにバランスよく培われた資質・能力をさらに発展・向上させるよう観点別学習状況の評価を普及していく必要性が示されています。

資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくために大切にしたいこと。

- 論述やレポートの作成、発表、グループでの話合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価等を取り入れる。
- ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていく。
- 一人ひとりの学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行う。

子どもが、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりするために大切にしたいこと。

子ども達が成長や今後の課題を実感できるようにすることが重要です。

- 日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子ども達自身が把握できるようにしていく。
- 子どもたちが自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付ける。
- 教師が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていく。

学習評価に関する工夫

- 評価規準や評価方法を明確にすること。
- 評価結果について教師同士で検討すること。
- 実践事例を蓄積し共有していくこと。
- 授業研究等を通じ評価に係る教師の力量の向上を図ること。
- 学校として組織的かつ計画的に取り組むこと。

保護者に評価に関する仕組みについて事前に説明したり、評価結果についてより丁寧に説明するなどして、保護者の理解を図ることも大切です。

小学校学習指導要領 解説 総則編 文部科学省 平成29年 6月
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/27/1387017_1_1.pdf